

# 風土



故郷は江戸

神蔵

器

旅立つや魚の泪の涼しかり

きらめきで風がひかりの雀の子

命二つこゑなき亀の鳴きにけり

二見文治竹は音存く皮脱げり

芭蕉庵趾まるまると梅は実に

ハンカチはにぎりしむもの男かな  
泰山木咲けり故郷は東都江戸  
燕来るこれや自作の桑の杖  
葉を立てて深き眠りの合歡の花  
野ざらしを心に江戸の夏の月  
ひようたんからこま桂郎の胡瓜もみ  
大夕立つひの一滴火のしづく



# 竹間集

同人作品



母の日

柴田 久子

母の日や遺影の母にありがとう  
五月来て曆剥ぐ音一直線  
さざ波のつまづく茅花流しかな  
麦秋や空翻す曲芸師  
駅にある点字運賃表涼し  
下闇に石一つあり坐りけり  
緑さす一尺五寸の翁像

薄 暑

中村 洋子

前方より後円までの薄暑かな  
一日の流れの違ふ麦の秋  
夏めくや珈琲に描くミルクの輪  
大道芸の口に火を吐く街五月  
雲水の一行に行く素足かな  
僧に蹤く百間廊下新樹光  
総持寺のスタンプラリー時鳥

縄干しの墨

橋添やよひ

縄干しの墨かわきゆく燕の子  
仰ぎては鞍馬の山の雲珠桜  
みどりさす祭まへなる神馬の瞳  
祭神は天鈿女命やかきつばた  
ほととぎす金剛峰寺に自刃の間  
庭風の涼しさにもてなされをり  
卯の花腐し延命治療辞退して

きゆつきゆつと

南 うみを

四迷忌の

浜 福恵

一七戸裡の忌を修す  
放哉の伏目の過ぎる牡丹かな  
鉄塔の脚のくひ入る植田かな  
朴咲いて水脈まつすぐにまつ白に  
竹皮を港は霧を脱ぎにけり  
赤腹が田螺の殻を蹴りすすむ  
小判草しきりに影を散らしをり  
きゆつきゆつと鳴くきぬさやを袋づめ

ほととぎす

宮川みね子

坂多き町に住み慣れ山法師  
折鶴の折り目正しく立夏かな  
トーストのバターの匂ふ麦の秋  
麗らかや夕日は山にとどまれり  
ほととぎす踊りはじめし茹玉子  
筆の穂に墨たつぷりと風薫る  
どの山もよき名を持てりほととぎす

春遊や花を集めて名はなんと  
七年目燕がひゆうと戻りきぬ  
田仕事の混み合ひなんぢやもんぢやの花  
田を植えて遥かに城の見ゆるなり  
山門自在睡蓮は白耀かす  
四迷忌の野越え山越え家郷かな  
跡継ぎのめでたく寺の鯉のぼり

さるすべり

山田暢子

鳥瞰の山開け放ちほととぎす  
夕焼けと別れて地下の繁華街  
薄暑かな机の上に正露丸  
水使ふことを増やしぬ五月来て  
母の日や正座して読む子の手紙  
老いてなほ人にふるさと花空木  
病む夫を眠らせ紅きさるすべり

太平記の里

鈴木 石花

城跡へ向かふ身幅の登山道  
山肌に残る石垣鴨足草  
城復元作業着々雲の峰  
山腹に史跡ガイド館夏の蝶  
利根川の渡し跡あり草茂る  
主亡き豪邸を訪ふ麦の秋  
飛行機王知久平偲ぶ夏座敷  
緑さす刀匠遺愛五葉松  
蛭飛ぶ新田義貞隠しの湯  
太平記の里の黄昏麻暖簾

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

舗装路に雀こぼれて街薄暑 生田 作

代田澄む那岐山系を遠く置き  
麓まで漣となる大田植

反芻の牛に筍流しかへな  
遠山の紺美作に夏立てり

大絵馬に駿馬の跳ねて里若葉 生田恵美子

御神体戻る村ぬち桐の花  
藤垂るる鳳凰堂のシンメトリ

花檣四囲の植田に風配る  
葉桜や金の揚羽の釘隠し

これやこの木遣りの街や燕の子 間島あきら

紫陽花や研師おもての外流し  
川風にいろづき初めし額の花

えごは実に護岸に潮位記録表  
開削は小名木四郎兵衛夏燕

鳥海へ高原鉄道さつき晴 石井美智子

高原の馬と目の合ふ薄暑かな  
重箱を早苗饗唄に回し合ふ

茹で卵剥く早苗饗の車座に  
釣堀の風はゆつくり回りけり

てのひらの石鹼匂ふ立夏かな 池田光子

杜若とんぼうの翅触れてゆく  
九頭竜の濁り膨るる祭かな

椎大樹祭巡行囀の貼られ  
薫風へ肘張つて吹く祭笛

◇特別作品◇(抄)

水郷逍遙

横田 晶子

佐原囃子あやめ祭りの扉を開き  
あやめ祭り嫁入り舟の祝詞かな  
水生植物園閉門近し牛蛙  
花あやめ残し水郷暮れにけり  
朝まだきカタカナ鳴きの行々子  
葎切の出迎へありぬ無人駅  
鳩の巢の波に漂ふ渡舟口  
あめんぼう見るより早く逃げにけり  
神官の去りし奥宮落し文  
裏参道「下に下に」と蟻の列

# 風土独語／神蔵器



小黒坂早苗蜻蛉が肩に来て

林 いづみ

小黒坂は、山梨県のほぼ中央をなす山岳地にあり、標高も四百メートル位で、東方に春日山があり、その山を源流として狐川が小黒坂を通って笛吹川に入っている。狐川の他にも名所山を源とした境川、それに芋沢川、間間川が共に笛吹川にそそいでいる。

この地の産業も戦後大きく変わって来だ。一番変わったのは養蚕で、桑畑が耕地の半分ぐらいあったのが、戦後は全く見られず、桃などの果樹園が殖えた。馬鈴薯の種芋は、内地では毎年、新しく北海道から取り寄せるのが決まっていたが、龍太さんは自宅の馬鈴薯から種芋をとることに注目し、苦心して成功した。

私が驚いたのは、飯田家の裏、狐川の大堰あたりから、流域一帯、かなり上流の方まで田圃がひらけ、すでに早苗は活着し、一株二十本以上もあるとかと多数の分蘖がはじまっていたことである。

さて、早苗とんぼであるが、一見、鬼やんまに似ており、ひとまわり小さい。日本全国に産し、東北日本のは胸側にある黒条が一条であるが、西南日本のは二条ある。イネの苗を取るころに発生するのでこの名がある。いずれも黒色の地に黄色の条紋を持っているが、この黄紋は老熟するにしたがって青緑色を帯びる傾向がある。

なお、早苗とんぼは、鬼やんまや他のとんぼ類のように懸垂して止まることはない。常に葉の上、地上、流水中の岩石上、とぎに棒の先、電線などにもきまって水平に止まる。

小黒坂は蛇笏龍太の小黒坂、「早苗蜻蛉が肩に来て」は、いつか早苗とんぼが翅をかがやかせながら作者の肩にすかにぴたりと水平に、作者の見る方向を見て止まったのである。そこになつかしさ、やさしさ、万感の思いがこもる。

藤垂るる鳳凰堂のシンメトリー

生田恵美子

鳳凰堂は平等院の中心苑池の中の島にあつて東面し、中堂と左右に翼廊と尾廊とからなっている。中堂は正面三間、側面二間、入母屋造、裳層つきで基壇上に立つ。中央の屋上に金銅の鳳凰を置いている。はじめは阿弥陀堂と言われていたようだが、江戸時代も初期頃から、大きく左右に羽をひろげた鳳凰の姿に似ているため鳳凰堂と呼ばれるようになった。

シンメトリー (symetry) は、左右の大きさ、形、色など、対称均斉でよく釣り合いがとれていることである。おそらく作者は前庭の方の藤棚の下から、広い阿字池の上に鳳凰堂を見たのではなからうか。

鳳凰堂にはあふれる感動もありゆめもあるが、短詩形では直接的になかなか表現できない。シンメトリーはたった一つの切り札であるう鳳凰堂を詠ったものに

水ゆれて鳳凰堂へ蛇の首

阿波野青歌

青歌の代表句がある。(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

かきつばた風の高さに見てをりぬ 高槻

浅田 光代

神山の水さかのぼる黒揚羽

矢印は山廬を指せり青ぶだう 東京

林 いづみ

酔をさして白米たたす立夏かな

小黒坂早苗蜻蛉が肩に来て  
ゆるがざる蛇笏の句碑や青嵐

爪先の三色カラー夏来る

一葉文学碑二句

針箱の中の種々梅雨に入る

葉桜の天蓋一葉文学碑

夏の雲翁のこ糸を放ちけり 福生

小峯 綾子

涼しさや今朝の芭蕉のくるぶしに

万緑や「才名千載留まらん」  
春昼の頬杖をつくカウンター 東京

柿沼 盟子

ひらがなのはがき一枚雲の峰

上り行きエレベーターの山法師

テニスボールころがる道や花は実  
顔ほどもある煎餅や麦の秋

短夜や体温計の音鳴つて

初夏のまだたよりなき蜘蛛の糸

千枚の一枚畦を塗り始む 藤枝

間島あきら

前山にはるけき声す新茶酌む

風五月天よりも地の輝けり 岡山

高村 令子

身の内の一問一答卵浪立つ

明日への便り茅花の絮放つ

一と色の風駈け抜ける大夏野

水底を夏日の歩む隅田川

二三戸の邑にふん張る鯉幟